

三木竹二研究（上）

—— 雑誌「歌舞伎」の編集方針 内容的特徴① ——

山 本 恵 美

はじめに

三木竹二は、慶応三（一八六七）年～明治四一（一九〇八）年に生きた劇評家である。本名森篤次郎。文豪、森鷗外の弟にあたる。彼は学生時代から三木竹二のペンネームで劇評を書き、「読売新聞」に投稿した。のち、雑誌「柵草紙」「歌舞伎新報」「めざまし草」などに健筆をふるう。明治三三（一九〇〇）年に、安田善之助の援助を受け、伊原青々園と共に演劇総合雑誌「歌舞伎」を主宰刊行した。自らも劇評や型の記録を執筆する。竹二の名司会による合評も、その形式の新しさ、内容の充実において以後の規範となった。また、「歌舞伎」において彼が行った型の記録は、放置されていた資料を整理した画期的な仕事であり、今日なお歌舞伎演出研究には欠かせないものとなっている。明治四一（一九〇八）年一月一日、氣道閉塞により没。その訃報は、地方新聞を含めた新聞各社が報じ、若い死を悼んだ。

竹二が亡くなって、一〇〇年以上の月日が経った。その間、いくつか竹二について言及する論文も発表されたが、兄、森鷗外の戯曲

や評論など、鷗外の演劇活動に伴って扱われることが多かったように思われる。たとえば、戸板康二は「森鷗外と三木竹二」において、「鷗外が外遊をして、欧羅巴の劇壇の空気を呼吸し味ひ、その舌で歌舞伎を今更味つて見た時に感じた事柄は、鷗外自身の口からは出ずに、竹二の筆をかりて世に出た事も度々あつたのではないかと私は考へたくて爲方がないのである」と述べ、鷗外の弟として、兄の考えを述べた竹二を想定した。また、金子幸代は「鷗外と『歌舞伎』」で、雑誌「歌舞伎」について、「伝統演劇、歌舞伎の見物者であつた竹二と、ドイツの近代劇を実際に見てきた鷗外という新旧の二つの歯車がかみあつた（略）、清新な活力に満ちた演劇雑誌」であると評価し、それぞれの特質を備え、独立しながらも協力し合った、鷗外と竹二の関係性を示した。

しかし徐々に、鷗外研究者の中にも竹二を再評価する声が開かれるようになる。大島真木は、鷗外の戯曲作品・翻訳作品について言及した後、「ほとんど世に忘れられた観のある弟竹二の名をもう一度思い起こすべきではないか。それはとりわけ鷗外初期の戯曲翻訳の協力者として、というばかりでなく、戯曲創作の動機を与え、さら

に死後にまで(略) 兄鷗外に『歌舞伎』寄稿のため継続的に戯曲翻訳、紹介の筆をとらせたと意味においても、二重三重に重要だと思われる^四と、三木竹二自身を再評価する重要性を指摘した。これに呼応するかのようには、渡辺保が「三木竹二は文豪森鷗外の弟であるよりもさきに一人の劇評家であった^五」と述べるなど、一人の劇評家として三木竹二を捉える視点が表れるようになってきた。

近年、三木竹二を再評価する動きはさらに活発化してきている。二〇〇四年には三木竹二初の単行本『観劇偶評^六』が岩波書店から出版された。さらに、二〇一一年には矢内賢二が、三木竹二の型の記録について、実際に本文を読み解き、従来よりも具体的な形式で型の記録の考察を行っているも、先述したような、兄鷗外との関係を軸にした研究や、三木竹二の人生を扱い、劇評家としての全体的な評価―戯曲から劇評をはじめる姿勢や、合評会の開催、型の記録などすべてを含めた総括的評価―を行った研究とは一線を画すものである。加えて二〇一〇年から、三木竹二が主宰・編集した雑誌『歌舞伎』の復刻版が随時発行され、三木竹二研究を本格的に進めるべき環境が整いつつある。

「歌舞伎」は明治三三(一九〇〇)年一月に創刊された、演劇雑誌である。創刊当初は竹二と伊原青々園^八で編集にあたったが、後に竹二が主幹となって、亡くなる直前の九三号(明治四一年一月)まで編集を行った。竹二が亡くなってからは、伊原青々園が編集を引き継いで、一七五号(大正四年一月)まで発行を続けた。非常に長命な雑誌である。「歌舞伎」という雑誌名でありながら、その対象は広く演劇全般にわたり、劇界の指導的役割を務めた。

今回、本論稿では、「三木竹二研究(上)」―雑誌『歌舞伎』の編集

方針 内容的特徴^①―と題し、三木竹二の「歌舞伎」編集時代に焦点を当て、竹二が「歌舞伎」をどのような雑誌にしたいと考えていたのか、また「歌舞伎」を通して演劇界をどのような視点で捉えていたのかを、考察していきたい。

三木竹二の「歌舞伎」編集時代に焦点を当てるのには理由がある。

第一に、「歌舞伎」編集時代の竹二からは徹底的に客観視する姿勢が感じられるからである。先行研究においても、権藤芳一が「いまや新進気鋭の気負いもなく、古老へのコンプレックスもない、むしろ、啓蒙家としての責任を感じ、指導者としての自信をもった、そういう態度が伺われる^九」と指摘しているが、明治二〇年代、「歌舞伎新報」等で発表された竹二の劇評や評論と比較すると、ずいぶんと落ち着き、分析的で、あまり表に自分の考えを出さない態度が明確に見られるのである。竹二にとって、「歌舞伎」は劇評家としての円熟期に発表の舞台となった雑誌であり、重要性が高いと考えられる。

第二に、従来の研究において、竹二の功績の評価対象が、先述したような戯曲から劇評をはじめる姿勢や、合評会の開催、型の記録などに固定化してしまっているのではないかと、という疑問があるからである。今挙げたこの三点が、画期的なものであるのは確かであり、今更争う必要はない。しかし、果して竹二の功績は本当にその三点だけであろうか。見過ごされてきた竹二の功績が、他にもあるのではないかと。そしてそれは、竹二の「歌舞伎」編集方針や、当時の劇界に対する考え方を知らるために重要な手がかりとなるものではないのか。このような理由から、三木竹二の「歌舞伎」時代に焦点をあて、竹二の功績を再評価することによって、「歌舞伎」の編集方

針と、そこに見られる竹二の劇界に対する考え方を検討していきたい。

方法としては、「歌舞伎」全体を考察対象とし、竹二が「歌舞伎」をどのような雑誌にしようと考えていたのか、調査していく。まず第一章において、「歌舞伎」がどのような雑誌であるのか、その沿革を示し、先行研究でどのように扱われてきたのかをまとめる。第二章では、三木竹二の同時代評で多くの指摘があった二、竹二の新派・旧派に捉われない姿勢が、どの程度「歌舞伎」誌面に反映されているかを考察する。第三章では、劇界の新しい動きを歓迎する竹二の姿勢として、海外の脚本や劇界をどの程度「歌舞伎」に紹介していたのか、また、その紹介記事は誰によって行われていたのか、調査する。同時に、地方演劇界に関する記事についても注目したい。これは、従来の研究でほとんど指摘されていないが、実際に「歌舞伎」を読んでいて、情報発信媒体の中心地である東京にいながら、地方演劇界にも目を配った竹二の編集姿勢は、現代において再評価されていいものであると考え、今回は筆者独自の視点として、「歌舞伎」誌面における地方演劇界という視点を加え、記事内容を検討したい。

これらを調査することで、「歌舞伎」の編集方針と、そこに見られる竹二の劇界に対する考え方を読み解くことを目的とする。

一 「歌舞伎」研究の現在

「歌舞伎」は、明治三三（一九〇〇）年に創刊された演劇雑誌である。雑誌創刊の経緯については、松廼舎主人二が追善号で詳細に

述べている二。雑誌創刊の話は、安田善之助から竹二に持ちかけられた。当初、竹二は「柵草紙」や、医学雑誌「公衆医事」等の編集経験から、編集の難しさが先立ち、乗り気ではなかった。しかし、青々園が関わるのであれば一緒にやってみよう、ということになり、明治三二（一八八九）年一月末に、創刊の相談のため、新富座へ集まることになった。この時のメンバーは竹二、青々園、善之助と伊臣真、岡野碩の五人である。その席で雑誌を発行することが決まり、竹二と青々園、善之助はそれぞれ準備に取りかかった。竹二は当初、月一回にするか年四回にするか、など悩んでいたようであるが、結局月一回発行の雑誌とすることに決まった。

編集・会計は主に竹二が担当し、青々園がその補助を行った。だが、途中から青々園は他の諸新聞や「演劇史」の執筆に力を傾けるようになり、「歌舞伎」も軌道に乗ったため、内容や体裁の助言を述べるに留まっていた。そのことに対し竹二は不満だったようだが、口うるさくは言わなかったようである。三。「歌舞伎」が軌道に乗るまでは、何度か廃刊に追い込まれた。具体的にどのようなことがあったのかは定かではないが、久子は「此の雑誌を始めたに就いては一通りならぬ苦情が出まして、其の八方からの攻撃は中々手厳しく、私も余りうるさうございませうから、幾度となく止めて居ました^四」と記憶している。また、善之助も「これが頗る難産であったのみならず、其後も度々病気に侵され、逆も生長の見込が無いとまで思はれた事もありました」と述べており、困難があったようである。しかし一旦軌道に乗ると、あれよあれよと言う間に頁数を増やし、四二号（明治三六年一月）からは、完全に善之助の手から離れ、竹二の雑誌となった^五。

表紙の変遷を辿ると、創刊号が題字、尾崎紅葉、表紙画、中村不折。八号では石井三礼題字、表紙画長原止水に変更される。一一号までは、毎号同じ表紙を使っているが、一二号からは、号ごとに表紙画を変えることになった。一二号では、「極まつた型のある狂言の衣裳や拵へを毎号毎に差替へる事として、即ち第一着は此の月歌舞伎座で団十郎が演ずるとか噂のあつた助六の拵を示したのでありまする^{二六}」と伊原青々園が表紙画について説明している。二三号(明治三五年二月)でさらに鏑木清方表紙画に変更された。二三号(明治三五年三月)では再び長原止水に戻る。二三号の表紙は、本郷座の初興行で女寅が纏った衣裳をモチーフにしている^{二七}。二四号(明治三五年四月)は再々度の変更で鏑木清方が担当。この後しばらくは清方の表紙画が続く。最後に三三二号(明治三六年一月)で久保田米斎^{二八}が表紙画担当となり、以降竹二が亡くなるまで「歌舞伎」の表紙を託されることとなる。ここまで米斎が担当しなかつたのは、おそらく米斎が、明治三〇年から明治三五年までパリに滞在し、帰国したのが同年一月一日であつたためと考えられる。米斎は留学中、巖谷小波に書状を送っていたが、その一節を、竹二は「巴里通信」と題し、「歌舞伎」に掲載している(一九号、明治三四年二月)。そこでは川上音二郎の巴里興行の感想や、「歌舞伎」を楽しむに読んでいることがつづられている^{二九}。

ではここで、「歌舞伎」の先行研究を見ていく。今日、「歌舞伎」を主たる研究対象として扱った研究はほとんど見当たらない。海外研究の関連から指摘されるものや、演劇史研究における資料的価値の高い雑誌として位置づけられることが多いようである。

海外研究の関連としては、代表的なものとして、金子幸代の指

摘が挙げられる。「歌舞伎」は「日本の伝統演劇である歌舞伎と近代劇の紹介という両輪に目配りした日本最初の総合演劇雑誌^{三〇}」という指摘である。「歌舞伎」の魅力は、伝統演劇、歌舞伎の見功者であつた竹二と、ドイツの近代劇を実際に見てきた鷗外という新旧の二つの歯車がかみあつたところにあり、清新な活力に満ちた演劇雑誌となつていた^{三一}と評価した。また、その誌面の特徴として、「歌舞伎」の劇評では、歌舞伎の上演にとどまらず、近代劇の上演も組上に載せられ、新旧の演劇が同時に紙面を飾る総合的な演劇雑誌として最も生彩のあるもの^{三二}とし、第一章で見た新旧に目を配つた竹二の公平な批評眼に対する評価と同様の観点で、「歌舞伎」を評価している。

演劇史研究においては、型の記録を行うことで古典劇演出の伝統保持に大きな功績を残し、また新演劇や外国劇の動向に対しても敏感な反応と関心を示したことや、脚本を積極的に掲載し、新鮮な創作戯曲の発表の場を提供したこと、外国戯曲の紹介も掲載、新劇の勃興に大きな影響を与えた点が一般的に評価されている^{三三}。

以上、第一章では、「歌舞伎」研究の現在」と題して「歌舞伎」の沿革と、「歌舞伎」の先行研究についてまとめた。次章からは、実際に「歌舞伎」誌面上の特徴を考察する。

二 「歌舞伎」における新派と旧派

本節では、竹二の新派・旧派に捉われない姿勢が、「歌舞伎」誌面にも反映されているかどうか、考察していく。

今回「歌舞伎」における新派・旧派の記事の分量についてグラフ化

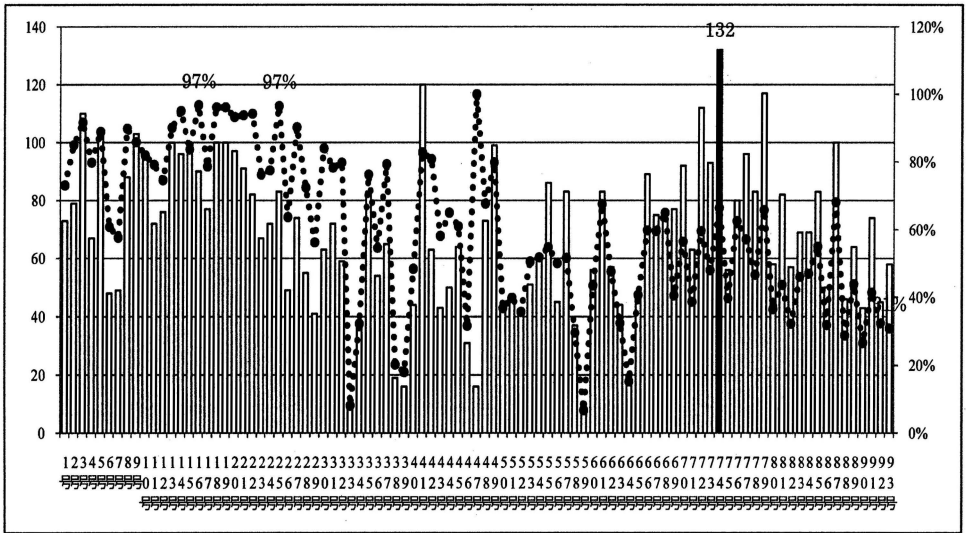


図1「歌舞伎」における「旧」頁数割合

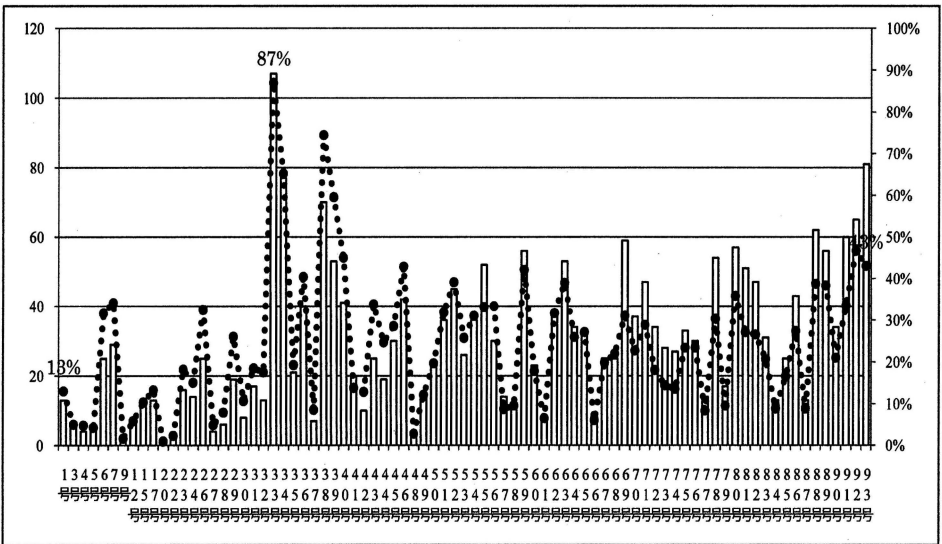


図2「歌舞伎」における「新」頁数割合

を行った。まず、旧派の記事から検討する(図1『歌舞伎』における「旧」頁数割合)。このグラフは、「歌舞伎」に掲載された記事のうち、「旧」と分類した記事の数をカウントし、作成したものである。どのような記事を「旧」と分類したかという点、歌舞伎劇・歌舞伎俳優・能狂言・落語等、今日日本古典文化として分類されるものに関連する記事分類してある。新派劇の狂言、創作脚本、翻案脚本であっても、歌舞伎俳優が上演したものはここに分類した。これは、明治三〇年代当時、劇界が動揺・混沌の中にあり、旧劇俳優が新派劇を、新派俳優が旧劇を上演することが珍しいことではなかったためである。このような時代背景をもつ演劇を、「旧」か「新」か、明確に分けるため、今回はこのような基準を用いた。また、上演されず、「歌舞伎」に紹介されるに留まった脚本であるが、作品の舞台を江戸時代以前に設定してあるものは、「旧」に分類してある。

ではグラフの分析に入る。図1は、「歌舞伎」に掲載された「旧」記事の頁数の変遷を棒グラフに、「旧」記事が「歌舞伎」に占める頁数の割合を、折れ線グラフに表したものである。これを見ると、七四号(明治三九年六月)において「旧」記事が「歌舞伎」の一三二頁を占めていることが読み取れるが、これは附録に竹二が「助六の型」を寄稿した号であったため、このような結果が出たようである。「歌舞伎」誌面を占める「旧」記事の割合としては、一〜三〇号までは八〇〜九〇%を越えている。しかし、三〇号以降徐々に減少していき、九三号ではわずか三二%となっている。「歌舞伎」に占める「旧」の頁数の割合は、減少の一途をたどっていることがわかる。

反対に、「新」のグラフ(図2『歌舞伎』における「新」頁数割合)はどうなっているだろうか。「新」に分類した記事は、壮士芝

居・書生芝居・新演劇・新劇・正劇を含む、新派劇・新派俳優に関連するものである。「旧」同様に、旧派劇の狂言や創作脚本、翻案脚本であっても、新派俳優が上演したものは「新」に分類してある。

一方、上演されず、「歌舞伎」で紹介されるに留まった脚本については、時代を明治以降に設定してあるものは、「新」に分類した。図1と比較するとわかりやすいが、「旧」記事が減少すると同時に、「新」記事が増加していることがわかる。この三三三号(明治三六年二月)は、鷗外の『玉匣両浦島』が上演された翌月に発行された号で、あらゆる知識人・演劇人がこぞって「歌舞伎」に『玉匣両浦島』の批評を掲載したため、ここまでの掲載割合となっている。この三三三号は特別として、それ以降も、「新」記事は微増していることがわかる。特に、九三号に関しては、「旧」記事が三二%だったのに対し、「新」記事は四三%と、すっかり数値が逆転してしまっている。

このように、竹二の同時代評に見られた、竹二の新派・旧派に公平な姿勢は、「歌舞伎」誌上でも表れていることが見て取れよう。竹二の劇評において、「歌舞伎」の号を重ねるにつれ、徐々に新派への劇評が増えていったのも、これらのグラフと重なる傾向であり、編集方針に伴った変化であることがわかる。

三 「歌舞伎」における海外・地方への視点

では次に、第三章において、海外からの視点と、地方への視点、という国外と国内の異なった二つの視点を、どのように「歌舞伎」に取り入れているか考察したい。

まず、海外からの視点であるが、「歌舞伎」における西洋との関係

については、金子幸代が以下の様な指摘を行っている^{二四}。

脚本の多くは、鷗外が翻訳したる西洋戯曲であった。(略)「歌舞伎」では正面から演劇論を展開するというよりは、西洋戯曲の梗概や解説を著している。当時まだなじみの薄かった翻訳戯曲の理解を促すため、読者の親しみやすい解説に取り組んでいたのである。(略)明治四〇年代になると「観潮楼一夕話」の中で、解説だけでなく精力的に西洋戯曲の翻訳を連載していく。西洋演劇の紹介は、まさに鷗外の独壇場だった。

この指摘は確かに「歌舞伎」の一面を表している。竹二が亡くなった明治四一(一九〇八)年一月以降、鷗外は精力的に「歌舞伎」に西洋戯曲を紹介し、活動した。ここには、弟である竹二が手掛けた雑誌を廃刊させまいとする鷗外の愛情と、劇界を牽引する姿勢が表れている。では、竹二が生きて編集を行った明治三〇年代、「歌舞伎」一号から九三号においては、海外紹介記事^{二五}とはどのような位置づけで掲載され、誰が執筆していたのであろうか。

図3 『歌舞伎』における『海外紹介』記事執筆者と掲載回数
のグラフを見ると、山下破鏡の記事が鷗外の実に二倍、掲載されていることがわかる。また、鷗外だけでなく様々な人々、特に武山成三、草野柴二も数の多さでいえば鷗外と同じくらいの海外紹介記事を掲載しているのである。このデータは、竹二の「歌舞伎」編集時代において、鷗外以外にも、海外紹介記事を担当した人物が複数いることを裏付けるものである。

具体的に、彼らの寄稿した記事はどのようなものであろうか。

最も掲載数の多かった山下破鏡の記事を見てみると、主に三つに分類される。一つは、「米国劇信」「印度劇信」などの、海外各地の演劇関連の通信、一つは、「古今演劇講話」という、海外の演劇史を紹介したもの、もう一つは、モリエール作品の翻訳である。竹二は、破鏡の最初の寄稿記事、「米国劇信」(四四号、明治三七年一月)を掲載する際、以下の但書を掲載した。

在米山下破信氏が寄せられたる「古今演劇講話」を本誌に載せるに先ち、同氏が如何に演劇に熱心で且つ一家の見を有して居らるゝかを読者諸君に紹介するため、左に同氏が小生に寄せられた書簡の教節を抄出する。三木竹二。

つまり、「米国劇信」はもともと「古今演劇講話」の前書という位置付けで掲載された、竹二宛の書簡である。しかし、四五号(明治三

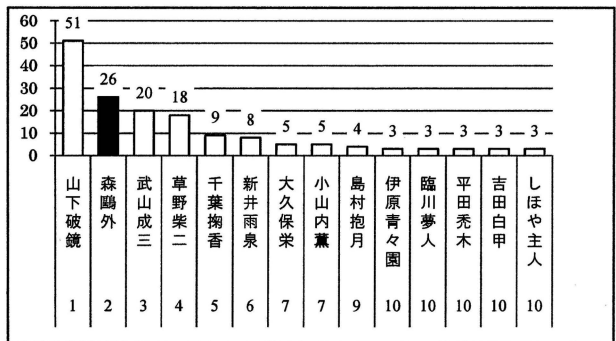


図3 「歌舞伎」における「海外紹介」記事執筆者と掲載回数

七年二月)になると、「米國劇信」単体で掲載されるようになる。内容は、アメリカ劇の評から、イギリスの劇場建築についてなど、多岐にわたる。「古今演劇講話」は、ラテン劇、エジプト劇、ロシア劇、等等など各国の演劇を題材に、それぞれの国の演劇の起りや沿革を紹介する記事である。時に挿絵を加えたり、実際の戯曲の一部を翻訳掲載したりするなど、研究的なものとなっている。

鷗外の次に記事掲載数の多かった武山成三は、主に海外の評論を抄訳して掲載した。たとえば、「英国に於ける狂言作者と批評家の論戦」や「初心俳優心得草」、「タルマの優技論」、「演技の緒」である。「英国に於ける狂言作者と批評家の論戦」は、イギリスの批評家が劇批評の際に心掛けていることを紹介している。「初心俳優心得草」を掲載して以降は、演技論に関する評論の翻訳を主に行っている。「初心俳優心得草」は、オックスフォード大学の朗読術講師、チャールズ・ウィリアム・スミスの『初心俳優心得草』を抄訳したもので、登場と退場や、老人に扮する時、など、役者の基本的な動きを指南した著作である。

武山成三の次に多かった、草野柴二の寄稿記事は、全てモリエールの翻訳であった。作品は『喜劇 染直大名篇』『喜劇 守銭奴』『脚本 女たらし』の三作品である。

鷗外の作品がそこまで多くなかったのは、鷗外が日露戦争で従軍していたことや、本格的に戯曲翻訳を行う時間がなかったためであろう。記事内容も、戯曲の梗概や評論など、比較的短い記事が多い傾向にある。

「歌舞伎」における海外紹介記事は、従来鷗外の独壇場とされてきたが、特に竹二の編集時代において言えば、独壇場と言うにはあ

まりに多様な人物がそれぞれの特色を生かした記事を寄稿している。山下破鏡の諸記事に関しては、当時実際に海外の演劇を見、その現状を逐一「歌舞伎」に掲載することで、日本の劇界を刺激しようとした竹二の意図が感じられる。もともと書簡として手元に届いたものであったが、竹二が「歌舞伎」に掲載することで大きく劇界に影響を与えたであろう。「古今演劇講話」は日本の歌舞伎劇と同様、諸外国にもそれぞれ演劇の起源があり、それがどのようなものであったかが紹介され、歌舞伎劇のたどる未来へのヒントともなっただろう。武山成三の海外評論紹介記事は、実際に歌舞伎に寄稿していた劇評家や、新旧俳優にとつて、おおいに参考になるものであったはずである。特に演技論に関しては、新鮮かつ重要性の高いものであったであろう。歌舞伎劇はお家芸であり、従来伝え学ぶものであった。しかし、新派劇においては、諸俳優が独自に工夫し、創造していかねばならなかった。混乱期にあった新派に、一つの演劇の指針を与えるものであったのではないだろうか。また、俳優学校の必要性を強く感じさせる契機の一つでもあったであろう。

次に、地方劇界に関する記事を見ていく。「地方紹介記事」については、地方の劇団や、地方公演を行った記事などをここに分類してある。新派旧派は問わず、また、東京の役者であっても地方で公演を行っている場合は、ここに分類してある。

「歌舞伎」に掲載された地方紹介記事については、五九号(明治三八年三月)で突出して多くなっている。これは五九号において、竹二が関西特集号とでも言うべき編集を行ったためである。

五九号の冒頭で、竹二は以下のように述べている。

編者申す。二月に於ける劇壇は、東京よりも大阪の方賑かにて、興味深かるべく思はれたれば、夙に関西の諸大家を煩し、其高見を請ひ得て、左に掲ぐ。

こうして、網版の写真も中央に大阪角座の『江戸城明渡』を据え、劇評執筆者も京都の高安月郊・山田桂華、大阪の喜多村緑郎・関根黙庵・小田春宵など、関西勢を誌面の前半に固めた。これは、関西が歌舞伎劇発祥の地であり、その技芸を東京へ取り込みたいという竹二の意図も垣間見られる編集方法となっている。

この号は特別関西に特化して記事が掲載されたが、それ以外の地方演劇に関する記事も見られる。たとえば、二七号（明治三五年八月）では、雪達摩が「新潟の芝居」と題し、新潟にある劇場に芝鶴一座が巡業で来た際の劇評が掲載している。また、三七号（明治三六年六月）では丙子生が「アイヌ芝居」と題して、野村シバンラム一座というアイヌ民族が行う芝居の批評を行っている。民族演芸の資料としても、貴重なものであると言えるであろう。

従来、「歌舞伎」は海外紹介記事の重要性が注目されてきたが、地方にも目を配った竹二の編集方針は特筆すべきものであろう。歌舞伎劇は江戸で花開いたが、その起こりは上方の能・浄瑠璃である。新派劇も同様に、壮土芝居は大阪から起こった。また、竹二の劇評でも見られる「現在」を記録する、という姿勢から、関西だけでなく新潟などの地方の演劇や、アイヌ芝居などの民族演芸にも目を配り、「歌舞伎」に掲載した。これは見過ごされてはならない「歌舞伎」の側面であると言えよう。

このような編集方針を執ったことで、実際に、東京だけでなく地

方にも「歌舞伎」の影響力は及んだ。竹二が亡くなった際には地方の諸新聞にその訃報が掲載され、土佐出身の田所半紫癡は、「僕は土佐の三木竹二であると、自称した事がある」ほどであった。彼は後、明治三七年ごろから竹二の元に入入りするようになり、明治三九年一二月に開催された忠臣蔵研究会へも参加した。竹二の晩年には短期間ではあったが、「歌舞伎」記者として尽力した。「歌舞伎」の影響力は十分地方にも浸透していたと言える。

おわりに

本論稿では、まず第一章で、「歌舞伎」の沿革を扱い、従来の研究における「歌舞伎」の評価をまとめた。第二章では、同時代評と、「歌舞伎」の先行研究でも指摘があった、竹二の新派・旧派に捉われない姿勢が、どの程度「歌舞伎」誌面に反映されているかを考察した。作成したグラフから、実際に、竹二の新旧に公平な姿勢は「歌舞伎」誌面にも表れていることがわかった。第三章では、劇界の新しい動きを歓迎する竹二の姿勢の一つである、海外の脚本や演劇界を、どの程度「歌舞伎」に紹介していたのか、また、その紹介記事は誰によって行われていたのか、調査を行った。従来、「歌舞伎」における海外紹介記事については、鷗外の寄稿記事について指摘されることが多かったが、今回の調査で、鷗外以外にも多様な寄稿者がいることがわかった。加えて、従来注目されてこなかった地方演劇界に関する記事にも言及した。地方紹介記事は、数は多くなく一定した傾向も見られなかったが、「歌舞伎」五九号では地方特集号とも言うべき編集形態がとられ、竹二が地方演劇界にも関心を配って

いたことがわかった。また、編集者が一方的に関心を持つのではなく、地方からの投書や、劇評の寄稿といった、レスポンスが見られることも特筆される評価の一つであると言える。

以上、本論考では竹二の「歌舞伎」編集方針として、新派・旧派にとらわれることなく劇評を掲載したこと、同時に海外・地方それぞれの演劇に目を配り、記事を掲載したことの二点に注目して考察した。このような編集方針をとったことで、「歌舞伎」は、歌舞伎と言う雑誌名を持ちながらも総合演劇雑誌として扱われ、当時の劇壇では屈指の存在であり続けたのであろう。

「財閥を形成した安田善次郎の長男。横阿弥、松の舎主人などの号を持ち、芝居の通人でもあった。

二『俳優論』(冬至書林、一九四二・一二)

三『森鷗外研究 六』(和泉書院、一九九五・八)

四『戯曲翻訳者としての森鷗外―特に第三木竹二との関連において』(平

川祐弘ほか編『講座森鷗外』第三巻、新曜社、一九九七)

五『三木竹二の兄 Books in my life』(新潮社、一九九八・五)

六『三木竹二著・渡辺保編『観劇偶評』(岩波書店、二〇〇四・六)

七『明治の歌舞伎と出版メディア』(ベリカ本社、二〇一・七)

八明治三(一八七〇)〜昭和一六(一九四一)年。劇評家・劇作家・小説家。三木竹二没後「歌舞伎」を主宰・編集。

九『三木竹二の人と仕事(近代の劇評家(特集))』(「悲劇喜劇」、一九八二・五)

一〇高安月郊は、「君は新しい趣味を持つて洋劇を紹介せられたと共に古来の歴史を捨てず、旧劇の妙味を重んぜられた。これが最得難い」(「三木竹二君を憶ふ」、『歌舞伎』一〇〇号)とし、新しい演劇の動きにも、旧劇の在り方にも、ともに目を配った竹二の姿勢を評価した。月郊と同

様にして、鈴木春浦は『歌舞伎』の経営者として、旧劇の型を保存するを力めると同時に、又大に西洋劇壇の物を歓迎され、毎晩鷗外先生の新しい西洋の脚本の梗概を、一夕話として自身に筆記された竹二の姿を、始終新しき人、新しきものを選んで募集する事に心掛けた竹二の姿を記憶している(「僕は泣虫だ」、『歌舞伎』一〇〇号)。さらに、伊井蓉峰は「元来公平な仁で旧派には旧派の趣味、新派には新派の趣味ありと云ふ風で褒める」姿勢(「僕が終生御辞儀をすべき人」、『歌舞伎』一〇〇号)を、新聞「日本」は、「新派劇の味を覚えてからは全く私と云ふ事を外にして更に公平な芸術と云ふ目から批評を下した」(「故三木竹二氏」、日本)一九〇八・一・三、三(三)面)、杉原阿弥は「三木君は新旧両立を認めたる人なり故に其劇評は公平なりき」(「嗚呼三木竹二君」、東京毎日新聞)一九〇八・一・三、三(三)面)と述べるなど、演劇界が新派・旧派で割れる中、竹二の公平な批評眼に対し、高く評価するのは枚挙に暇がない。

一安田善之助の筆名。矢内賢二は饗庭葦村であると指摘しているが、饗庭の筆名は竹の舎主人である。小金井喜美子「次ぎの兄」(『森鷗外の系族』岩浪書店、二〇〇一・四)や森まゆみ「君に見せたきものあらば」(『鷗外の坂』新潮社、二〇〇〇・七)でも安田善之助のことであることが明記されている。

二松廬舎主人『歌舞伎』の生立(『歌舞伎』一〇〇号、明治四一年一月)

三伊原青々園「亡友三木竹二君」(『歌舞伎』一〇〇号、明治四一年一月)

四森久子「亡夫」(『歌舞伎』一〇〇号、明治四一年一月)

五注一に同じ。

六伊原青々園「助六考 及び本郷の表紙絵」(二二二号、明治三四年五月)

七三木竹二「勝山の風俗」(二三三号、明治三五年四月)

八明治六(一八七四)〜昭和一一(一九三三)年。画家。書道・俳諧・和歌・演芸などをたしなむ教養人であった。久保田米儼の息子。

一九米齋の留学中の動向については、永井久美子『日本画家』久保田米

齋の文才」(『比較文学研究』八三、二〇〇四)に詳しい。

二〇「日本近代劇再考―『オセロ』上演と鷗外の『歌舞伎』―」(『富山大学人文学部紀要』(四二)、二〇〇五・二)

二一金子幸代「その戯曲」(『森鷗外を学ぶ人のために』世界思想社、一九九四・二)

二三「鷗外と『歌舞伎』」(『森鷗外研究六』和泉書院、一九九五・八)

二四注二二に同じ。

二五「海外紹介記事」には、欧米に限らず、アメリカ、中国など、海外の演劇活動・俳優育成について紹介した記事や、翻案小説・海外脚本やその梗概などの記事を分類してある。